〝おいしい〟から考えるアジアの環境問題～地産地消と知産知消～

「食」をテーマにした第6回環境シンポジウム「〝おいしい〟から考えるアジアの環境問題～地産地消と知産知消～」が、このほど大阪市内で開催された。アジア・オセアニア諸国における調査研究の助成や、環境の保護などを支援する公益財団法人 りそなアジア・オセアニア財団が主催。料理研究家のコウ ケンテツ氏らが登壇し、基調講演やパネルディスカッションが行われた。

■開会あいさつ
りそなアジア・オセアニア財団理事長
池田　博之氏
（りそな銀行副会長）

私どもは現地の方を手助けしながら自律的に環境保全活動に取り組む事業へ助成を行っており、そのプロジェクトをより多くの方々に知っていただく目的でシンポジウムを開催しています。今回は、人間にとって最も身近で大切である「食」をテーマとし、アジア各国で活動される料理研究家のコウケンテツさん、企業の環境活動としてキリン株式会社様よりお話を伺うとともに、財団事業は2人の女性より発表させていただきます。食を通じて現地におけるさまざまな状況を鑑み、日本人ができる役割を考える機会にしていただければと思っております。

■趣旨説明
人間文化研究機構総合地球環境学研究所教授
阿部　健一氏
（りそなアジア・オセアニア財団環境事業選考委員長）

おいしい食事の話が、なぜ環境問題と関係があるのか。副題に2つの「ちさんちしょう」という言葉を挙げております。最初の地産地消は、ご存じの方が多いと思います。地元のものを地元で消費する。これは環境負荷が小さいわけです。生産者と消費者が非常に近い所にある。これも大事なことです。

もう1つの知産知消は、あまり知られていない言葉だろうと思います。私たちは世界中から来ている、いろいろなものを食べます。これは一体どういった人たちが、どういった環境で、どういった形で作っているのか。消費者が生産地、生産者を知る。生産者は、どういった人が味わうのかを知る。お互いが知ることによって、もっと豊かな関係ができるのではないか。こういったことも考えていただければというのが、今回のシンポジウムの趣旨であります。

基調講演①「コウ ケンテツさんのおいしい話」

料理研究家
コウ ケンテツ氏

人と人の豊かなつながり
フィリピンで学んだご飯の素晴らしさ

私は、テレビ番組の企画でアジアの各地へ旅に行かせていただきまして、ホームステイをして家庭料理を教わるということを8年くらいさせていただいております。アジアだけで、もう20カ国以上行かせていただきました。家庭に入って、キッチンに立たせていただく、料理を一緒に作らせていただく、そうすることで、その国の人たちのことがよく分かると思います。

一番印象に残ったのが、フィリピンのバナウエという地域にある世界遺産の棚田です。この地域に約2千年間、同じ手作業で稲作をされているイフガオ族がいらっしゃいます。ここで急遽、ホームステイをさせていただいたのですが、快く受け入れてくれました。家の窓から世界遺産を毎日見られるというすてきな環境です。今の時代に完全無農薬というのは本当に難しいことで、それをずっとされています。

お世話になった家は、15人家族です。一緒に田んぼで作業をして、ご飯を作って、遊ぶという生活を1週間させていただきました。毎日食べていたご飯が、野菜炒めです。材料は自分たちで作っているキャベツ、唐辛子、それだけです。15人家族ですから、大きな鍋に野菜を大量に入れます。薪のとろ火で30分炒めると、水分が出てきてシナっとなります。豚を飼われているので、そのラードですこし炒めます。毎日、これだけです。しかし、飽きたと思ったこともなかったし、これ以外のものを食べたいと思ったこともなかったのです。「このおいしい野菜炒めは何だ?」と思いながら、毎日、いただいていました。

家族として迎え入れてくれたことが、このおいしさにつながりました。日本に帰ってから「フィリピンのとっておきの料理を作ってあそこでしか、イフガオ族の家族と一緒にしか食べられないのです。

自分が世界のどこにいて、どの季節にいるのかということについて、食べ物を通して時間と空間を意識して、理解することができる。地産地消の良さというのは、そこだと思います。そして、その土地のものをいただくということにつながると思うのです。

私は現地の人々のことをダイレクトに感じることができました。だからこそ、料理のテクニックではない、高級な素材ではないところで、野菜炒めがこんなにおいしかったのだということを、その家族に学ばせていただいたのです。そういう形で、いろいろな地域の人と地元のものを一緒に食べることは、人と人を豊かに結びつけてくれるのだなということを、私が駆け出しの頃にイフガオ族の家族に教えていただいたのです。

今、料理家として料理の技術や、おいしいレシピを紹介させていただいています。しかし、根幹のところでは、おいしい時間であったり、空間であったりを共有する。それがご飯の素晴らしさであり、そして、人がつながっていくという大切なことなのではなかろうか。そのように思いながら、活動させていただいております。

基調講演②「持続可能な農業を目指すCSV活動」

キリン執行役員　CSV戦略部長
林田　昌也氏

私が今、推進をしていますのが、CSVというものでございます。なかなか耳慣れない言葉かもしれません。「Creating Shared Value」という英語の略語でございますが、日本語にすると、企業と社会が共有できる価値の創造。社会課題に取り組み、社会的価値を創造すると同時に、それが企業の経済的な利益も生んでいくという考え方です。

スリランカの農園支援
企業の利益を生みながら社会的課題に取り組む

私の話は、スリランカの紅茶葉がメインになります。キリンはスリランカの紅茶農園の持続可能性を支援しています。「午後の紅茶」は、キリンビバレッジの主力商品ですが、かなりの茶葉をスリランカから輸入させていただいています。日本が輸入する紅茶葉の約半分が、スリランカから入っています。そのスリランカから入っているものの約4割、全体の2割を午後の紅茶に使わせていただいております。

単に環境だけではなく、地域の経済、彼らにとっては、やはり農業が根幹の経済になりますので、これがしっかり回っていくということも当然重要です。もう一つ大きいのは、そこで働いている方々の生活レベルを上げる、あるいは子供たちに次のステップの教育機会を差し上げるようなチャンスを、地域経済とセットになりますけれども、生んでいくということにもつながります。

CSVですので、われわれの企業が利益を上げて継続していくことが前提です。あるいは利益をしっかり上げることによって、社会課題の解決に継続的に取り組めることのメリットもあると思います。

まだまだできていないことがたくさんありますが、精いっぱい、進めていきたいと考えております。

ランカから輸入させていただいています。日本が輸入する紅茶葉の約半分が、スリランカから入っています。そのスリランカから入っているものの約4割、全体の2割を午後の紅茶に使わせていただいております。

単に環境だけではなく、地域の経済、彼らにとっては、やはり農業が根幹の経済になりますので、これがしっかり回っていくということも当然重要です。もう一つ大きいのは、そこで働いている方々の生活レベルを上げる、あるいは子供たちに次のステップの教育機会を差し上げるようなチャンスを、地域経済とセットになりますけれども、生んでいくということにもつながります。

CSVですので、われわれの企業が利益を上げて継続していくことが前提です。あるいは利益をしっかり上げることによって、社会課題の解決に継続的に取り組めることのメリットもあると思います。

まだまだできていないことがたくさんありますが、精いっぱい、進めていきたいと考えております。

品質な茶葉を作る。その結果それをわれわれが仕入れることができる。こういう関係にあります。

単に環境だけではなく、地域の経済、彼らにとっては、やはり農業が根幹の経済になりますので、これがしっかり回っていくということも当然重要です。もう一つ大きいのは、そこで働いている方々の生活レベルを上げる、あるいは子供たちに次のステップの教育機会を差し上げるようなチャンスを、地域経済とセットになりますけれども、生んでいくということにもつながります。

CSVですので、われわれの企業が利益を上げて継続していくことが前提です。あるいは利益をしっかり上げることによって、社会課題の解決に継続的に取り組めることのメリットもあると思います。

まだまだできていないことがたくさんありますが、精いっぱい、進めていきたいと考えております。

文字情報（0）
画像情報（0）
ふれ記事情報（0）
適化未処理情報（0）
ノクロ不在画像情報（0）

公益財団法人 りそなアジア・オセアニア財団

第6回環境シンポジウム

アジアの環境と食について熱い議論が交わされた

参加者

【パネリスト】
コウ　ケンテツ氏
林田　昌也氏
伊能　まゆ氏

【コーディネーター】
阿部　健一氏

パネルディスカッション「アジアの環境問題をもっとおいしく考える」

おいしいものは壁を取っ払ってくれる

コウ　ケンテツ氏

阿部　まず林田さんにお伺いしたいのですが、どうしても企業となると営利、利益重視ではないか、と。本当に信頼関係を結べるのかという感じもするのですが、どのような工夫をされていますか。

林田　先ほどの紅茶の話ですと、レインフォレストの認証を取るということの支援をさせていただいていますが、しっかり認証を取得した農園の茶葉の価格は確実に上がります。そんなに即座に変わるわけではありませんが、その農園、あるいはそこで働かれている従業員の収入が増える、生活の基盤が上がっていくということになります。そういったことを共同しながら進めているつもりです。

阿部　伊能さん、ベトナムの現状をお話しいただけますか。

伊能　平野部は農薬の乱用もあり、土壌や水源などでは汚染されているところも多いのですが、山はそれがあまりないです。だから、今のうちに有機で市場を開拓しておけば、そういうものを作れる環境があるということで、それ自体がアドバンテージになるわけです。地域作りにもつなげていけますし、消費者の市場を開拓できるという意味でも、小規模の農家の人にとっては、ちゃんとやればきちんと収入が上がっていくめどが立ちます。

阿部　コウさん、何か個人でもできるのではないかという話をお聞かせいただければと思います。

コウ　食と環境という面では、実際に農薬を使っている地域の人に、もうそういうことはやめたほうがいいよ、みたいなことを言うと、「農薬などは全部あなたたちが開発したものではないか、これを今われわれが使って生産の効率を上げようとしたときに、なぜ駄目だと言うのだ」という理屈がアジアの皆さまの中にはあるのです。私は、そういうことを実際に言われて返答に困りました。答えようがなかったのです。ただ、環境にいやというほどダメージを与えてきて、この生活があるという土台があります。それをアジアの方に伝えることによって、経済成長とともに環境を破壊しなくてもいい方法を伝えることができるのは、実はわれわれではないのかなと思います。

林田　今までわれわれは、どちらかというと大農園をまずは支援させていただいていたのですが、来年からはもう少し小さな、個人でやっているような農園にも、次の支援をしていこう、それが生産にもつながると思っています。実態を把握しながら、順番を追ってですが、そういったこともさせていただこうと思っています。

伊能　地域の大事なものは何かということをずっと村の人たちと話していて、リーダーの人が自分たちの村を守るには、環境を守らなければいけないということに気が付き、その方向で今、村がまとまってくるようになったということが、十何年の活動の成果かなと思いました。少しでも農薬や化学肥料などを使わないような農法で、ちゃんと経済は回りますよということに取り組んでいくということが大事だと思います。

コウ　おいしい食べ物は、壁を簡単に取っ払ってくれますので、いろいろな現地のものを食べていただいて、価値観を共有していただく、これが環境を改善していくには遠いように見えて、近道なのかなと思っています。

阿部　コウさんは、講演で料理は時間と空間を共有できるツールだというようなことをおっしゃいました。本当にそうだと思います。どうもありがとうございました。

農園従業員の生活基盤を上げる

林田　昌也氏

有機農法が市場へのアドバンテージに

伊能　まゆ氏

コーヒー生産地と消費地をつなぐ、そして学び合う

人間文化研究機構
総合地球環境学研究所
嶋田　奈穂子氏

■ 事例発表①

平成26、27年に東ティモールの有機コーヒー栽培を支援することで、森林保全につなげる取り組みをしました。

私たちは2つの目標を持っていました。1つは、彼らに自分たちのコーヒーが、日本でどんな人に飲まれているのかを知ってもらうことです。もう1つは、天然の森の中で育つコーヒーの栽培・収穫の方法が、遅れた農業方法ではなく、とても価値の高いものであることを理解してもらうことです。自分たちの栽培方法とコーヒーに誇りを持ち、それを持続してもらうために、1年に3人ずつ東ティモールから日本に招聘して、いろいろな研修を受けていただきました。

コーヒーの「地産地消」は日本では無理なのですが、われわれの取り組みは「知産知消」を進めるものだったことを、今回のセミナーで気づくことができました。

ベトナム北部山岳に暮らすムオン民族と取り組む環境保全型の村作り

特定非営利活動人 Seed to Table 理事長
伊能　まゆ氏

■ 事例発表②

私たちが活動を実施している地域は、ベトナム北部の山岳地域で、首都のハノイから車で約3時間のところに村があります。そこはムオン民族という人たちの故郷であり、ムオン民族は棚田を耕しながら小規模で家畜を飼い、森のものをうまく活用して暮らしています。各村には在来の植物が多く残されています。それらは人々の暮らしを守っていくうえでも大切なので、在来のタネを守る活動をしています。それと組み合わせて、有機農業の技術を紹介して市場を開拓していくということをしています。また、地域の環境を守るためには人材育成も大切なので、若者たちと共に村の環境問題を調べ、改善策を立てて実践しています。今後の展開は、ベトナムではフェイスブックの使用率が高いため、広報のツールとして活用し、集落ごとに人々の暮らしや農作業の様子など魅力を伝えていく予定です。

主催　公益財団法人 りそなアジア・オセアニア財団
共催　大阪府、大阪産業振興機構
後援　大阪市、大阪商工会議所、関西経済連合会、ジェトロ大阪、ＪＩＣＡ関西、りそな銀行、近畿大阪銀行、産経新聞大阪本社

<企画・制作>産経新聞社営業局

下在文字情報（0）
下在画像情報（0）
らふれ記事情報（0）
設適化未処理情報（0）
モノクロ不在画像情報（0）